

## 評伝 矢内原忠雄 (六)

### A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 6)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

#### 第六章 大学転出とヨーロッパでの研修

##### 一 東大助教となる

新居浜の別子鉱業所に勤務した矢内原忠雄と妻愛子に最初の子が授かったのは、一九一八(大正七)年五月二日のことである。忠雄はこの長男に伊作という名をつけた。旧約聖書「創世記」に出て来るアブラハムの子、イサクにちなんでの命名であった。聖書を読んでいる者には、このことは説明抜きですぐ分かる。

ところで、当時勤務を共にした歌人山下陸奥の「新居浜時代のこ  
となど」<sup>1)</sup>には、忠雄に子が誕生したことにふれて、「一年余経った

或る日、男の子が生まれた事を告げ「伊作」と名づけたといつて甚だ得意のようであった。いうまでもなく聖書からと伊予で生まれたからである」とある。なるほど伊予(愛媛県の旧国名)で作った子だから伊作か、イスラエルの祖先とされる信仰者イサクと伊予で生まれた子との意味をかけての命名であったかと、はじめて覚った次第である。関東地方で生まれ、育ったわたしには、イサクにちなんだことはすぐに分かって、伊予生まれをも命名に託したことは、すぐにはピンとこなかったのである。

伊作誕生にまつわるエピソードの一つを、ここに記しておきたい。子息の矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』<sup>2)</sup>に紹介されているもので、若き日の矢内原忠雄の一面がよく現れている。引用しよう。

私が生まれたのは大正七年五月二日である。生まれたばかり

の赤ん坊の私を抱いて父は「おはつにおめにかかります、不肖ながら私があなたの父親です。どうかよろしく」と芝居気たつぷりに言つて周囲の人を笑させたということである。これは遺産の世話をするために来ていた愛子の母、つまり私の祖母の西永薫がのちのちまで語り草にしていたことだった。父にはこういうユーモラスなことを言つて人を笑わせる一面があったのであり、幸福な新居浜時代にはこの才能がしばしば発揮されたらしい。

こういう面は、忠雄の神戸一中時代からのものであり、妹の悦子の追悼文「忠兄さんの想い出」<sup>3)</sup>にも見られる。暑中休暇で家に帰ってきた忠雄は、土用干しを手伝い、「昔の袴をつけて刀をさして部屋中を歩いたり、母の着物を着て女の人の歩くまねをしたりして家の者らを大笑いさせていた」という。一高時代の矢内原忠雄も総じて朗らかで、疑いを知らないような人、何事にも積極的で、公の会合などでも先に立ち奔走する人であった。それは仲間の誰もが認めていた。彼は冗談を好み、誰とでも好き嫌いなく交わった。それゆえ内省が足りないとか、「声があまり大きすぎる。自己の生活にもつと空虚と寂寞と分裂とを意識せねばならない筈である」とか、同学年ながら二つ年上の倉田百三から「生活批評―矢内原忠雄君にあつたふ」<sup>4)</sup>で批判されたこともあつた。このことは第三章で詳説したところだ。その後、母や父、そして親友の死などに接し、彼の心にも陰りが生じたとはいうものの、初めての社会人生活であつた新居浜時代は、自信をもつて勤務と伝道に励んだ幸せな日々であつた。それゆえ伊作の書きとどめたようなエピソードも、さもありなんと思わ

せるのである。

けれども後年の、一九三〇年代以降の矢内原忠雄には、このような話はいぞ見出せない。そこには秋霜烈日の如き厳格な性格の持ち主、冗談一つ言わない恐い人、近寄り難い人物は見出せても、ユーモアを解し、冗談を口にすると、朗らかな、愉快な人物は、もはや見出せないのである。それは第二次世界大戦後の東大総長時代まで、否、その死にまで及ぶ。なぜそうなつてしまつたかは、本評伝が追いつ追いつ明かすところでもある。激動の時代の中で、特に一九三七(昭和二年)の矢内原事件を体験し、彼は性格が変わつたかのように、自他にきびしい、恐い人となる。人間矢内原忠雄のこうした側面にも、以後の章ではしつかり光を当てることにしている。

さて、伊作の生まれた翌一九一九(大正八)年九月十五日、矢内原家の大黒柱、祖母トヨが死去した。トヨのことは、すでに第一章で詳しく述べたが、忠雄の父母が没した後、矢内原家の全責任を負う存在であつた。以後富田村の忠雄らの生家は、忠雄の五つ年下の悦子が、護ることになる。祖母の死の少し前から忠雄には、東京帝国大学経済学部から植民政策の講座担当助教授の口が掛かつていた。東大の経済学部は、この年、法学部経済学科から独立し、発足した新学部であつた。植民政策の講座は、忠雄の恩師新渡戸稲造が担当していたものである。が、新渡戸は、翌一九二〇(大正九)年に国際連盟事務局の事務次長就任のため、担当講座が空席になることが確定していた。その補充人事であつた。

当時の東大経済学部は、学部長金井延のほかに、古参教授の山崎覚二郎・矢作栄蔵・河津暹・それに高野岩三郎とその門下の大内兵衛・権田保之助・細川嘉六・森戸辰男、さらに忠雄をよく知る舞出

長五郎・糸井靖之らがいた。新渡戸の推薦とそうした教授連の同意があつて、矢内原忠雄に白羽の矢が立ったのである。なにせ忠雄は東大法科大学経済学科を一番で出た秀才という評判があり、その性格は純粹で、仲間づきあいはいいときている。大学人事は学問上の単なる才能ばかりでなく、その人物のパーソナリティーも時に評価にかけられる。

忠雄はその点申し分なかつた。この人事に関して大内兵衛は、「日本植民学の系譜」と題した文章で、「矢内原君は東大で新渡戸先生の講座をついだ人であるけれども、矢内原君がそういう地位にいたのは、新渡戸先生のせいせんによるものではなく、舞出君や森戸君のせいせんにもとづいて高野岩三郎先生が決裁したものである」と書いている。が、大内は一方で、「赤い落日―矢内原忠雄君の一生」という追悼文においては、「矢内原は新渡戸先生が国際聯盟の事務局次長になつてジュネーブに滞在することになつたので、その後任としてくる人である、助教授舞出君と新渡戸先生の推薦によるものであるということであつた」とも言う。これは後者の方が正しいように思う。いずれにせよ忠雄は、恩師や同学の友に強く支持されていたのである。

忠雄は東大からの誘いに對し、すぐに飛びつくような態度は示さなかつた。植民政策というのは、植民地をいかに統治していくかを考える新しい分野の学問であり、専門研究者は、まだいない時代であつた。忠雄は東京帝大在学中、新渡戸稲造の植民政策の講義を聴いたとはいへ、この分野に関する論文は、一つもなかつた。大学に教員として就職するには、学問的業績が問われる。彼の出版物といへば、前章で扱つた『基督者の信仰』のみである。が、新しい講座

であり、他に適任の学者がいなかつたこともあつて、在学中の忠雄のまじめな生活ぶりや優秀な成績を知つてゐる長老教授連の反対もなく、すんなりと決まつたようだ。子息の矢内原伊作は、「彼は慎重に考慮し、一度はことわり、重ねて招請があつたので先輩や友人にも相談し、幾度か躊躇し、長い熟慮のうちに漸くこの招聘を受けることにしたのである」と言う。忠雄は事に対しては常に慎重であつた。彼は故郷の家を担う妹の悦子宛の便りで、次のように書いていた。

東京の友人から大学の方の交渉を受けたのは大分前のことである。其時（丁度祖母様死去の後）は断つてやりました。その後再び交渉がありました。私は二三の友人に相談して見た処皆賛成でありました。私はずつと前から自分には学校生活が最も適任の様に思はれるので早晚教育界に身を投ずるに至るべき平と思つて来たのです。それで私には大学と一高とが候補者になりました。若し松木へ帰居するならば今治中学の教師となるのでせふ。一時はその考も無いではありませんでした。けれども更に私は勉強を致し出来るだけ成長発達致しなるべく有効に神の御為めに尽し度考です。田は色づきて刈る者を待つて居ります。今や世界は福音を聞くの飢饉に瀕して居る様です。日本のみならず外国皆然りです。私は更に学び更に教へられ多くの人に福音を頒ち度考です。その為めに東京へ出たいと思ふのです。

（一九一九・二〇・二九付）

矢内原忠雄は一高基督教青年会の仲間であつた長崎太郎が、日本

郵船に勤務しながら将来の目標を教育界に置いていたのと同様の考えを持っていた。右の便りも語るように、忠雄は教育と研究の職場が自分にはふさわしいとかねがね思っていたのである。が、彼はその前に一度民間の会社に就職し、生きた社会の空気にふれたいとして住友に入社した。それゆえ東大からの誘いに応じたのは、考えれば当然のことだったと言えよう。東京帝国大学経済学部では、いまだ学問的業績はないものの、新渡戸稲造の衣鉢を継ぐ矢内原忠雄ならば、この新しい学問を拓くであろうと見越しての就職要請だった。忠雄には未だ新居浜での仕事と伝道に未練があった。けれども、東大で教え、研究生生活に入ることは、それ以上のやりがいのある仕事と次第に思うようになる。

かくて矢内原忠雄は新居浜を去る。忠雄は丸三年新居浜に居住し、住友別子鉱業所に勤務したことになる。新居浜を去る日のことを、彼は「私の伝道生涯」の「第一回 新居浜の思ひ出」に綴っている。以下のような。

私が小さい家族をつれて新居浜を去る日、惣開の岸をはしけ舟が離れて、櫓声静かに沖がかりの汽船に向つて漕ぎゆく時、岸に立つた集会の兄弟姉妹の間から起つた「また会ふ日まで」の讚美歌が、遠ざかり行く小舟にいつまでもく聞こえて、別離の情に胸のつまつたことも、昨日のやうに思ひ出される。私が去つた後、しばらくして黒崎さんも大阪に転任したが、その後も新居浜の集会は長く続いた。住友病院の集りは、私の後を受けて、私の兄がつづけてくれた。

引用の最後に出て来る「私の兄」とは、すでに何度も名を出した矢内原安昌である。安昌は一九一九(大正八)年の春から住友肥料製造所(現、住友化学)に勤務し、新居浜の集会にも熱心に出席するようになっていた。忠雄の家族伝道は、この頃になると兄安昌のみならず妹悦子や千代、さらには弟啓太郎にも及んでいたのである。なお、矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、「幸福な新居浜時代の忠雄を一層よろこばせたのは、大正八年春、兄の安昌が京都から新居浜に転住し、住友肥料製造所(現住友化学の前身)に勤務するようになり、さらに右の集会に参加し、信仰をともにするようになったことである。以後安昌は昭和二四年一月に病没するまで新居浜に住み、信仰を維持し、忠雄の最もよき理解者、忠雄の発行した伝道誌『嘉信』の最もよき読者だった」とある。

年が明けた一九二〇(大正九)年一月二十七日、矢内原忠雄は満二十七歳となった。東京帝国大学経済学部助教授の口は正式に決まり、三月に住友を辞職、家族三人で上京した。東京での最初の住まいは、東京府奥多摩郡中野町大字中野一七九四番地であった。中野は今も新宿区に隣接する中野区を中心街であるが、当時は府下と呼ばれ、東京市外の田舎町であった。恐らく当時東中野に住んでいた義兄となった藤井武の斡旋によつたのであろう。

東京帝国大学経済学部では、一九一八年末、助教授森戸辰男の「クロボトキンの社会思想の研究」(『経済学研究』創刊号、一九一八・一〇)という論文が、法学部の上杉慎吉ら右翼教授から危険思想として弾劾されるといふ事件が生じていた。年を越した一月には、森戸と雑誌の編集発行人の助教大内兵衛が朝憲紊乱、新聞紙法違反で起訴されていた。いわゆる森戸事件である。矢内原忠雄の経済学部着任

は、その直後のことであつた。忠雄は就任早々、学内の右翼勢力の横暴と官権による検閲という表現の自由の問題に直面することになる。厳しい言論弾圧は、学内の対立にも影響を与えていた。表現の自由剥奪の問題は、やがては忠雄自身にも及ぶことになる。

矢内原忠雄の戦前における東大での研究生生活は、検閲問題や学内外の右翼との闘いの歴史であり、戦後はその体験を生かしての大学の自治や、表現の自由を守る闘いであつたと言えるのである。それは時の権力への〈謀叛の叫び〉であり、その淵源は一高時代に接した蘆花の「謀叛論」演説にあつたとわたしは考えている。一高の先輩河合榮治郎や河上丈太郎、さらには同期生であつた文科の恒藤恭・成瀬正一・松岡譲、さらには芥川龍之介らにも通うものが、そこにはあつた。本評伝では、そうした矢内原忠雄の権力に対する〈謀叛の叫び〉を、同時代知識人共通の課題として捉え、しっかりと追うことにしている。

東大経済学部助教として矢内原忠雄が担当しなければならなかつたのは、それまで恩師新渡戸稲造が受け持っていた植民政策の講座である。植民政策は前述のように若い学問であり、参考文献としての先行の理論書など日本にはない時代で、講座担当者自身が切り拓くほかない分野であつた。忠雄は在学中講義を受けた新渡戸稲造の講義ノートなど、僅かの資料を頼りに研究に励んだ。早朝から夕方まで東大経済学部の与えられた研究室に籠もり、彼は研究に精を出す。

この年四月三十日付で新居浜の松尾逸郎宛の便りの一節には、「小学生当地の生活は毎日学校の研究室に來り静かに読書を致し居り候。日曜午后には内村先生の御講演を承り居り候。前回よりヨブ記も御

話を始められ候。又土曜夜は藤井宅にて学生に対し聖書研究あり小生も出席致居候」とある。授業の準備や専門の研究に没頭できるのは、何よりもうれしいことであつた。それは彼の性に合っていた。他方、彼はあこがれの人物、内村鑑三のヨブ記の講義に列席する。また近くの藤井武宅での聖書研究にも出席していた。家庭的には、新居浜で身籠もっていた妻愛子が、七月十四日に二男光雄を生んだ。忠雄は二児の父親になつたのである。

東大就任当初の授業とか、コマ数のことなどは、一切不明である。当時の忠雄書簡には、授業のことは一切記されていない。戦前の帝国大学の教官はかなり恵まれた条件下にあつたから、就任当初は秋からの欧米留学が予定されていたこともあつて、担当授業はなかつた。周辺資料に目を通して講義のことは出てこない。そこで忠雄の授業は、一九二二(大正一一)年の帰国の後からと考えるのが妥当である。同様のことは内務省事務官から東京帝国大学法学部に転じた南原繁についても言える。南原は一九二二(大正一一)年五月に東大法学部助教に就任、同年八月九日には、神戸港からヨーロッパへの在外研究に出発している。担当授業の開始は、帰国のことであつた。

東大就職直後の忠雄は、前述のように毎日研究室に通い、専門となる植民政策の研究や欧米留学のための準備に明け暮れていたようだ。とにかく彼は、自分にもっともふさわしいと考えていた仕事に就き、研究に没頭できる環境を喜んだ。当時は帝国大学に教官の候補者となり、採用が決定して着任すると、すぐにも文部省に申請して、在外研究に出かけることができた。忠雄もさつそくその恩恵に浴したのである。

八月九日、植民政策研究のため二年間のイギリス・ドイツ等への留学を命じるとの辞令が文部省から忠雄の許に届く。二年間というのは原則であり、当時は申し出ると、半年ほどの延長が認められた。留学期間中は、給料の三分の二が留守手当として支給され、あとは文部省の規定による在留費が月々平均四〇〇円ほど給与され、他に願い出によつて、国から国へ移る場合は移転旅費というものが出た。この金額は現在の金額に換算しても、かなり恵まれたものであった。しかも、第一次世界大戦後の為替レートの円高は、外国滞在には有利であり、一年間の支給額で二年間は楽に在留できたというほどであった。まさに留学生黄金時代と言つてもよい。ただし、妻子は同伴しないのが原則である。戦前の日本では、妻子連れなどもつての外であった。現在の在外研究とは異なり、いまだ封建的気風の色濃く残つた日本では、単身赴任は当たり前だったのである。

## 二 イギリス行き

一九二〇(大正九)年十月十四日、矢内原忠雄は東京を発ち、欧米留学の途につく。留学時代前半のことは、『矢内原忠雄全集』第二十八巻に、毎日欠かさず書いた日記(自一九二〇・二〇・一四〜一九二二・二・三三)が収録されているので、その大要を知ることができる。忠雄の同僚の一人で、一高時代からの友人の舞出長五郎は、この時期すでに留学中であった。部や科は異なつたが、一高・東大と同期だった哲学の藤岡蔵六は、東北帝国大学に新設予定の法文学部への就任が内定すると、一九二二(大正一〇)年七月上旬、ドイ

ツのフライブルグ大学に留学する。一高の同級生で京都帝国大学へ進み、助教となつた小来栖國道は一九二二(大正一一)年に、同じく京大助教となつた恒藤恭は一九二四(大正一三)年の留学だから、忠雄の留学は大学卒業後三年間の住友勤務があつた割には早い。新設学部であつたことが幸いしたのかも知れない。ついでに記すなら、一高同期の芥川龍之介がはじめて海外特派員として中国に行くのは、矢内原忠雄留学中の一九二二(大正一〇)年のことである。彼らはみな海外に出て、外から日本を観ることで、大きく成長する。

忠雄は妻愛子と二人の子を、石川県金沢市長町の愛子の実家西永家に預けて留学の旅に発つ。第一次世界大戦後のヨーロッパには、多くの日本人が滞在していた。円高の影響もあり、日本人の滞在には、有利な条件がそろつていたからである。忠雄は希望に胸をふくらませていた。初めての外遊、——恩師新渡戸稲造が常に口にしたのは、若い時に日本を出て、外国から日本を見よ、そうした上で日本と外国を比較せよということであつた。忠雄はその機会の訪れたのを喜び、船上の人となつた。

当時ヨーロッパへ行く手段は、船便きりなかつた。現在のようにジェット機に乗れば十二時間ぐらいで着くという簡単なものではなかつた。ロンドンまでとなると、一ヶ月半もかつたのである。忠雄は神戸で二日を費やし、十月十七日午前十一時、神戸出港の日本郵船若狭丸に乗船、ヨーロッパへ旅立つた。日本郵船という船舶会社の名は、忠雄には親しいものがあつた。それは一高基督教青年会で一緒だった長崎太郎の就職先だったからである。長崎太郎は一九一七(大正六)年京都帝国大学政治学科を卒業、日本郵船株式会社に入社し、横浜支店を経て一九二〇(大正九)年の四月には、

ニューヨーク支店勤務となっていた。友人つきあいのいい忠雄は、そのことを知っていた。そして、アメリカ經由の帰国に際しては、長崎太郎をニューヨークに訪ねたいと密かに思っていたのである。

当日の日記に船名が *Wakasa manu* であつたこととそれにファースト・クラスの客室であつたことが、記されている。さすが留学生黄金時代のことだけある。同室は東大理学部助教授の小林辰雄であつた(門司で宗正路が乗り込み相部屋となる)。出港の日の日記に、「天気が晴航海平穩」と書く。希望に溢れた船出であつた。当日の日記には続けて、「乗船後主に熱く祈る。彼地に於ても主の御名を崇めさせ給へと祈り、これ迄の主の御導きを感謝し、彼地にありても雲の柱火の柱となりて我が歩みを導き給ひ信仰墮落の危険より我を支へ給ひ、よし彼地にて死するも感謝と讚美のうちに主に至るを得せしめ給へ、もし御心に適はば再び健やかに歸りて家族の手に迎へらるるを得せしめ給ひわが妻わが子わが友凡てを守り給はんことを祈り熱涙滂沱たるを禁じ得ざりき」とある。留学期間中の忠雄は常に神と共にあり、祈りを忘れない。

神戸を出た若狭丸は門司を経て、二十一日の午後三時、上海着。半年後芥川龍之介がやつて来る大都会である。上陸し、同室の小林辰雄と宗正路と共に南京路や四馬路を馬車で見学した。上海は夜になると、「*tea-house* 及び街路に淫売あらはれ行人の袖を引く様態さまたを消すに値す」と忠雄は日記に書く。さらに「此の道德腐敗の盛なるに *Stan* の都もかくやと思ふばかりなり」と記す。二十一日は、朝七時五十分上海発の汽車に乗り、小林・宗とともに蘇州へ行く。水の都蘇州を三人は驢馬に乗って巡り、虎丘禪寺・寒山寺などを見学した。暖かな日で「馬上睡魔を催す」と忠雄は日記に書きつけて

いる。蘇州では中国人の排日貨の状況も知り、「何故日本人は排斥を受けしやを考へたり」とも記す。上海には二十四日まで四日間滞在した。その間 *Public Garden* や *Jessfield Park* などにも行つてゐる。短い滞在ながら彼は見るべきものは見、聞くべきことは聞いている。百万都市上海には多くの日本人も住み着いていた。忠雄は「支那人は租税を負担すれども *Councillor* 選挙の権利なし」とその矛盾を二十四日の日記に書き留める。

十月二十五日、午前九時、若狭丸は上海を出帆、十一月二日夜、シンガポール港着。上陸し、植物園などを見学する。以後、十日コロンボ、二十五日ポートサイドに寄港する。航海中も彼は朝夕の祈りを欠かさない。「朝夕の祈りこそ実に船中の生命である」と彼は十一月十一日の日記に記している。若狭丸が地中海を横切り、フランスのマルセイユに着いたのは、十二月二日午前九時であつた。日本を發つて一ヶ月半のことである。当時ジュネーヴにいた三谷隆信から電報が届いており、出迎えには行けないが、ジュネーヴに来ないかとあつた。そういえば、恩師新渡戸稲造も国際連盟事務次長としてジュネーヴに滞在していたので、気持ちは大いに動いた。が、まずは留学先となる最終目的地のロンドンに行くべきと考え直し、以後は汽車の旅で、陸路パリ経過でロンドンに向かう。

十二月二日午後六時四十五分、矢内原忠雄は「*France* 田舎初冬の景色美し」と記している。むろん車窓風景である。パリは通過に留め、三日、午後四時半、ドーヴァー海峡に面した港町カレー着。五時連絡船が出港し、六時半イギリスのドーヴァーに着く。再び列車に乗つて、午後九時ロンドンのヴィクトリア・ステーションに到着。一高

の同級生で、イギリス領事館勤務の井上庚二郎夫婦が迎えに来ており、Royal Palace Hotelに案内された。井上は世話好きで、しかも、物事に筋を通すことのできる人物であった。第四章でふれたが、一高時代新渡戸稲造校長辞任に際しての学生大会で議長を務め、井川恭(恒藤恭)をして、「議長井上君の態度は立派であった」(井川の日記「向陵記」一九三・四・三)と言わせた人物である。

翌日十二月四日は、領事館にまず井上を訪ね、井上紹介の郊外の下宿へ行く。領事館には日本の妻愛子から五通の手紙が届いていた。翌十二月五日は日曜日であった。日記に「反復愛子の手紙をよみ涙禁ずるを得ず」と記す。忠雄は、まだ航海中の十一月十七日の日記に「愛子及子供を恋ふの心近来頻りなり」と書いていたが、ロンドンで接した愛子からの便りに感激したのである。若き日の矢内原忠雄は、人一倍の寂しがりやである。また、涙もろく、日本の妻と子を思つて泣くこともしばしばであった。

十二月十二日の日曜日には、下宿近くのUnion Churchの礼拝に出席する。当日の日記には、「異郷にあり外国人に交りて共に父なる神を讚美し感謝の落涙禁じあへず、Londonに來りて実に涙脆くなりしを感ず」とある。井上庚二郎が斡旋した下宿は、The Fir's, Wood-ford Green of Mrs. Lucilla Cook 方であった。シセス・スクックはクリスチャンの老婦人である。以後、旅を含めて九ヶ月のイギリス生活を、忠雄はここを本拠として過ごす。のちに彼は、「余のイギリス滞在の愉快なりしことの大半は此のFir'sに宿を与へられしことに因るなり」と日記(一九二・九・二)に書くことになる。井上はイギリス滞在中の矢内原忠雄の面倒を、実によく見ている。それだけにイギリスを去るに際して忠雄は、日記に「倫敦滞在中隨

分井上の家庭の世話になり慰めらるる処が多かつた。真に感謝である」(一九二・九・二)と書き留めるほどであった。

季節は冬になっていた。彼は各地の教会に出席したり、日本人の友人を訪ねたりする一方で、British Museumに行き、ギリシャ・ローマの彫刻を見、在外研究の最初の年を送った。十二月二十一日の日記には、テイト・ギャラリーで多くの名画を観たことが記されている。テイト・ギャラリーは、かつて留学中の夏目漱石が日参し、ミレーの「オフィーリア」を観た美術館である。忠雄はテイト・ギャラリーの多くの名画に心打たれると同時に、美術品の収集・展示ということにも思いを馳せる。「British Nationは勿論世界万邦の民來りて之等の名画を自由に観覽するを得。之を我国多数の富豪が古今の名画を争ひ買ひて己が庫中に藏し自己と雖も一年数回展覧するに過ぎざると此すれば如何ぞや」との感想も記される。この日はワット、ターナー、そしてウィリアム・ブレイクの絵に魅せられたことも記している。ブレイクの絵に感動した記事は、以下のようなだ。

Blakeの特色ある画数点あり、多く題材を聖書及Danteより取る。余はDanteを知らざる故その題材に関する画については感興少かりしも彼の Satan smiting Job 及び Elijah about to go up heaven on the wagon of fire の二画は其深遠なること測るべからず。Job 仰臥し Satan 其上に立ち苦しみの杯を注ぐ、Jobの妻はJobの足下に座し髪を以て顔を掩ひてなげく。見よJobの端然として伸ばされたる両手を！之れ実に深きJob記の註釈画なり。余未だ斯くの如きものを見ず。

ウィリアム・ブレイク (William Blake) は、イギリスの詩人であり、画家であり、銅版画師としても知られる。彼は生粋のロンドン子である。矢内原忠雄は文学や絵画にも理解があり、一高時代からブレイクには関心を示していた。いや彼ばかりではない。当時の日本の知的青年の多くは、ブレイクに憧れていた。それは一九一〇(明治四三)年一高入学の仲間のほぼ全員にも言えることであった。雑誌『白樺』は、毎号西洋美術の紹介記事を載せており、『白樺』主催のブレイクを含む西洋美術の展覧会を開催するほどだった。一高最初の一年を、南寮十番で忠雄と共に送った井川恭(恒藤恭)にしても、その友芥川龍之介にしても成瀬正一にしても、ブレイクへの憧れは同様であった。芥川はブレイクの複製の銅版画、「生命との別れを惜しんで身体上を浮遊する心霊」を、田端の自宅二階の書齋に飾り付けるほど、ブレイクが好きだった。芥川と親交ののあった画家の小穴隆一は、「二つの絵」(『中央公論』一九三二・二・三三)に、「二高時代(?) 神田で一枚の「ウィリアム・ブレイク」の複製を発見して金参円の全財産を投じたがために新宿まで歩いて帰らなければならなかった」という芥川のエピソードを紹介する。当時芥川家は、新宿に仮住まいしていた。小穴はさらに、「そのブレイクの絵は後に彼の考案による画架にのせて死ぬまで二階の書齋の壁に掛けてあつた」と補筆している。

芥川が一九一五(大正四)年九月十九日付で、井川恭に送った書簡に書き込まれた詩の一篇「希望」と題されたものには、次のように右のブレイクの銅版画が詠み込まれている。

こんどこそよい子をうまうと

牡鶏のやうに私は胸をそらせて  
部屋の中をあるきまはる  
今まで生んだ子のみにくさも忘れて

こんどこそよい子を生まうと  
自分の未来を祝福して  
私は部屋のすみに立止まる  
ウィリアム・ブレイクの銅版画の前で

この詩は芥川が失恋の痛手から立ち直り、新しい出発をしようとの決意を親友の井川恭に示したものだ。右の作中の「子」とは、作品と読み替えてもよい。ブレイクは若き芥川に大きな力を与えていたのである。こうした中から生まれたテクストが、「羅生門」(『帝国文学』一九一五・一)であり、「鼻」(『新思潮』一九二六・二)であった。

また、一高基督教青年会で親しかった長崎太郎も、大のブレイクファンであったことが、近年はつきりした。彼は後年日本郵船ニューヨーク支店勤務中、ブレイクの版画や詩集を買いあさり、日本の隠れたブレイクコレクターとされた人物である。長崎太郎の買い集めたブレイクの版画の中に『ヨブ記挿絵集』(Illustrations of the Book of Job)がある。矢内原忠雄がテイト・ギャラリーで観た Satan smiting Job は、『ヨブ記挿絵集』の中の一枚であったと思われる。忠雄はそれを「ヨブ記の註釈画」と評したが、「註釈画」とは適切な造語である。忠雄は以後もブレイクに関心をもち続けた。ヨブの絵は、以後も時々テイト・ギャラリーに入っては観ている。翌年三月九日の日記には、「William Blake の Job を見且つ彼の小伝をよ

みて感動したり」の文言を見出せる。

こうした中で、矢内原忠雄のイギリス生活最初の年が終わる。一九二〇(大正九)年十二月三十一日の日記に、「今年の大なる出来事は余の別子より大学に転じたること、光男の出生、及留学なり。内的にも外的にも頗る意義深き一年なりき。余の為したるよき事(若し有らば)も悪しきことも凡て主イエスにゆだね奉り自己はただ恩恵のみを背負ひて心榮しく更に恵みの一年に入ること如何ばかりの感謝ぞ」と彼は記している。

一九二二(大正一〇)年一月一日、土曜日。矢内原忠雄はイギリスロンドンで新年を迎えた。この日午後二時半、忠雄はアルバート・ホールでヘンデルのメサイアを聴く。「余の胸の震ひ如何ばかりなりぞや」と彼は言い、メサイアの歌詞を抜粋して日記に記している。また、「ハレルヤchorusの歌はるる時は聴衆総立ちとなりたり、此のMessiahは毎年元旦のConcertにてハレルヤchorusの時は全部起立する習慣なりといふ」と記し、「終りし時は五時半なり。此のconcertを聞くを得しは実に大なる幸福なり。帰宅後も心感激と愉快とに溢れて容易に眠られず。深く主の苦難と勝利について思へり」との感想を吐露する。矢内原伊作は、「ともかく彼は後年までこのときの感激をもち続けていて、太平洋戦争直後のころ、かつてロンドンで買い求めてきた古い『メサイア』のレコードを信仰上の弟子たちにくりかえし聞かせた」ことを証言する<sup>10)</sup>。

ロンドンでも、忠雄は多くの友人たちの中にいた。若き矢内原忠雄は、自分では「非社交的」などと日記に記すが、実際は明朗な、誰からも愛される社交家であった。日本人とはよく交わり、孤独に閉じこもることはなかった。当時ロンドンには日本領事館の外交官

井上庚二郎はじめ、カトリックの東大助教田中耕太郎や内村鑑三門下の盲人伝道者好本督らよしもとたすがおり、忠雄は積極的に彼らと交わった。また、ロンドン日本人会にも出席した。彼は積極的に友を訪ねる。そして午餐や夜食に招かれている。

ロンドン生活での読書や勉強は、British MuseumのReading Roomでするのが常であった。彼は日々熱心に学んだ。一方、彼は日本の妻を慕い、その便りを待つことが多かった。「今日は何だか愛子の手紙来て居る如き気がしたからつとめて早く起きたるも無駄なりき」(一九二二・一五)、「愛子よりあまり手紙が来ないので心配す」(一九二二・一八)、「余は彼女の手紙を受取らざること三週間に達す、毎週一回の手紙さへ待ち遠かりしに……余の空虚、弛緩を満たすものは彼女の手紙なり」(一九二二・二二)などの記事を日記に見出す。彼はせっせと手紙や絵はがきを日本の妻に出す。絵はがきの一部は残っており、『矢内原忠雄全集』第二十九巻に収録されている。その一通、一九二二(大正一〇)年一月八日付のものには、「お前の手紙がもう大方二十日も来ないが病気で居たのではないか、或は泰ちやんが非常にわるかつたか、何しろあまり手紙が来ないから心配して居る」とある。泰ちやんとは、若くして逝った愛子の弟、西永泰のことである。当時愛子は、弟西永泰の看病と葬儀、それに二人の子どもの世話に疲れ、自身も病床にあった。が、ロンドンの忠雄は、それを詳しく知るすべもなかった。今でもそうだが、一般的に海外に住む者には、祖国からの便りがしきりに待たれる。他方、祖国に住む者は日々の生活に追われ、海外への便りはどうしても疎くなる。まして血縁の者の死に遭い、葬儀その他の雑事と、幼い二人の子の面倒に追われた愛子には、夫への便りどころではなかった

のであろう。

一月十九日、待ちに待った愛子からの便りが届く。前年十二月十四日付のものであった。この便りで忠雄は義弟西永泰の死を知る。彼は日記に「泰君昨年十一月二十九日死去とのことなり。彼遂に主を信ぜずして逝く、悲しむべし。(中略) 愛子はたましひ及肉体の全力を尽して泰君の介抱に従事したる如し、彼女の悲しみ同情すべし、主彼女と共にあり給ひ凡ての事働きて彼女に益を為さんことを。西永両親の心泰君の死によりて如何ばかり痛手を負ひしやらん。主彼等の傷をいやし給はんことを祈る、而して両親の心主に向ひて開け其光を受くるに至らんことを祈る」と書き記している。忠雄は感傷的になっていた。翌日一月二十日の日記には、「ああ時よ早く過ぎ行け、愛子の愛の胸にかへる日よ早く来れ、お、愛子よ、わが妻よ」と書くことになる。

忠雄は British Museum の Reading Room で、気に入った本を読む。また、各種博物館を見学し、アルバート・ホールでの音楽会にもしばしば顔を出す。大学には籍を置かず、せっせと英文の書物に親しみ、芸術鑑賞に精を出した。日曜日には教会に通った。が、「説教いつも物足りず、Bibleを教へざるが故なり」と彼は二月六日の日記に記している。聖書研究の足りないメッセージに苛立っているのである。二月十四日には愛子よりの便りで、黒崎幸吉夫人「おすみさん」の死を知る。その日の日記に忠雄は、「Sad news! Very sad news!」と書きつけてくる。

黒崎幸吉の妻すみ子(寿美子)の死は、一九二二(大正一〇)年一月四日のことである。すみ子は旧姓高木、女子学院を卒業し、黒崎に嫁いだ。黒崎の「恩恵の回顧」<sup>15)</sup>には、「性格は貞淑、柔和、親切

という言葉は良過ぎるかも知れないが当たっていると思う」とある。黒崎の師内村鑑三は、その死を聞き、日記に「黒崎幸吉夫人寿美子永眠の報に接していた甚く悲んだ、彼女は余の理想の婦人であった、柔和で、常識に富み、信仰厚く、堅実であつた。福音化された日本流の賢夫人であつた」と記している。

忠雄も「あの信仰あつく愛に富みやさしく親しみ深き姉妹、多くの人を助け慰め殊に余等の家庭にとりては誠の姉にもまさる深き愛を注がれし姉妹、黒崎兄の家庭にとりて大損失なるは言ふ迄もなけれど余等にとりても亦深き悲嘆なり。謙遜にて思慮深く慈愛に富みたる彼の女! 多くの近頃の女と異なり彼女は殊に「慈愛」の徳を備へたりき。その慈愛により其の常に *hopeful* なる言葉により如何ばかり余等の新居浜生活が助けられしぞや」と先の日記に続けて書く。黒崎幸吉は妻の死を契機に住友を退職し、独立伝道者となる。

二月二十六日、神戸一中・一高・東大の先輩で、忠雄に大きな影響を与えた川西實三がロンドンに来、再会する。川西は国際労働機関日本政府代表随員として、スイスのジュネーヴに赴任のため、ロンドンに立ち寄つたのである。翌二十七日の日曜日には、川西の要望で St. Paul's Cathedral の礼拝に出た。午後はリッチモンド公園などを、二十八日はテムズ河畔の城砦、ロンドン塔を案内している。久しぶりの再会で、話題は尽きなかった。三月一日、川西實三をヴィクトリア駅に見送る。

矢内原忠雄はロンドンに住んでから、いつも大英博物館の読書室で読書と勉強をするのを日課としていたが、この年三月一日から四日まで、一時 Reading Room が閉鎖されることになった。忠雄は「如何にして暮さんかと思ふ位なり」と日記に書きつけている。忠雄は

ロンドン到着以来、未だこの地の大学には顔を出していない。彼はひたすら British Museum の Reading Room で必要な書物を読むのに専念していた。彼はそれを「仕事」と称した。また、博物館や美術館で泰西の名画を観、Albert Hall や New Oxford Theatre での音楽会に行くのが常であった。劇もよく観ている。日曜日には、教会に通った。三月十六日の日記には、黒崎幸吉からの便りで、彼が住友を辞め、伝道に一身を捧げるといふ決意を知ったことが記される。当日の日記の終わりに、忠雄は「黒崎兄のために祈りを以て之を助けざるべからず。藤井兄は別として金沢君伝道に入りて今また黒崎兄新生涯に召されたり。知らず余は何時なりや。あゝ、主よ余をも召し給へ余をも召し給へ！」と書く。

四月二十六日火曜日から忠雄は、ロンドン大学の講義を聴講する。日記には「今日より School of Economics & Political Science にて Mr. Joynt の Economic development in the British Empire の講義を聞く」と記している。ロンドンに来て、はじめての高等教育機関での学習である。翌日の日記には「School of Economics にて今日は Dr. Knowles の British History of Commerce and Colonization の講義をきく。Dr. Knowles なる人の女であつたのに驚きたり」とある。ロンドン・スクール (ロンドン大学) は、矢内原忠雄の欧米留学先の一教育機関として記憶に留めたい。四月二十九日の日記には、「London School of Economics にて Mr. Lees Smith の British Constitution なる lecture を聞き始む」との記事を見出す。が、彼の主要勉強部屋は、British Museum の Reading Room であることには変わらない。この留学時代の勉強に関しては、大塚久雄との対談『私の歩んできた道』<sup>15)</sup>に出て来る。引用しよう。

今の留学する人はなかなかよく勉強するけれども、僕らの時代の留学生には三種類のタイプがありまして、一つはコチコチになって自分の専門を勉強してくる人。それから、自分の専門は日本に帰ったら勉強できるというので、できるだけ視野を広くし、まあ、今の言葉では教養を積む——最高裁の田中耕太郎君はそれで、ピアノを習ったりして、ヨーロッパ滞在の時間を使った。それからもう一種は、専門の勉強もしなければ教養も積まない。ただ遊んでくるという部類のタイプの人たちです。舞出長五郎君というのは第一種の人なんで、よく勉強したんです。本を読みましたね。僕はむしろ第二種の方ですね。しかしたぬになりましたね。僕は田中君ほどでないが、音楽について、絵画、彫刻、美術について、それから思想ですね。思想とか、社会運動とか、そういうものについて興味を開かれたのはその貴重な留学の期間です。だからそういう暮し方もそう悪くない……。

右の発言は、在外研究の意味をよく理解したことばである。ヨーロッパに滞在することは、自分の専門を勉強するだけが目的ではない。広く教養を積むことも大なる目的であつてよいとの考えは、忠雄の先見性の一つを示している。かつて日本の大学では、英文科の教員がイギリスやアメリカに留学するのは理解しても、日本文学科の教員がヨーロッパやアメリカに研修に出掛けるのに、拒絶反応を起こすことがあつた。予算が限定されているのだから、専門の教員をこそ優先して派遣すべきだといふのである。彼の地で日本語や日本文学の比較研究をするのは第二だ、否、おかしいというのだ。な

んと狭い考えであろうか。それは大正期のことではない。昭和の終りの一九八〇年代の後半、高度経済成長の直中の頃の話である。田中耕太郎や矢内原忠雄の留学への考えとその行動は、平成の今日の在外研究者にも当てはめてよいものがある。ものを見る目を養い、広い教養を付けるのは、たこつばの専門領域に閉じこもるよりも、はるかに有益だからである。

イギリス滞在中の忠雄は、何度も記したように、大英博物館 (The British Museum) の読書室 (Reading Room) に籠り、経済学やキリスト教関係の多くの本を読み、アルバート・ホールの音楽会に行き、テイト・ギャラリーでブレイクの版画をはじめとする美術品に触れることに時間を割いた。図書館・博物館・美術館・音楽堂、それにロンドン塔などの名所旧跡に足をのびた回数、他の留学生以上のものである。運動はテニスを定期的に行った。また、体力を維持する散歩のため、ハイド・パークなどにもよく行った。

彼の精神は、在外研究中にあつても、極めて健全である。妻からの便りのないのを嘆いても、病気のせいと諦めて、読書と論文と例の処女出版となった書物『基督者の信仰』の加筆に精を出す。論文は「英国植民省に就て」(五十六枚)である。また六月十日の日記に、彼は「Lifeを enjoy. せんとする享樂主義に眞の happiness は伴はず、眞の幸福は義務と責任の遂行に伴ふものなることを感じた」と記している。実に健全で揺るぎない留學生生活である。が、彼は寂しがりやであった。六月十五日の日記には、「夜さみしくて bed の側に跪き神様の慰めを求め泣きたり。何だか知らず此頃又非常にさみしくなつて仕舞つた」とある。留學生につきもののホームシックに、彼も時に陥っていたかのようにだ。

この年(一九二二)の夏、矢内原忠雄は北ウエールズ、アイルランド、スコットランドへの旅に出る。ロンドンスクールでの聴講や大英博物館の読書室での読書や執筆もよい。しかし、彼はイギリスの各地を見ておきたかったのである。留學先での初めての旅であった。まず下宿先の Cook 一族の推薦する北ウエールズの Crickethn に向かった。七月十二日、朝十時四十分 Euston 駅を發ち、夕六時過ぎ目的地に着く。海辺の街である。宿はジョージ・ホテル。翌日十三日の日記に忠雄は、「朝食前海水に浴す。眞に爽快なり、海水の水きれいに魚の泳ぐ様よく見える。あこがれて居た海水につかりて一泳ぎせる時の快さ! 風涼しく水冷たく二十分ほどしたらガタ／＼身体が震えて来た。朝食後 Castle の廢墟を訪ふ。すぐ海に沿ひたる小丘なり。Rome 時代の城にて Edward I が修理せしものといふ。海風真に快し、草に坐し読書し又手紙書く」と記している。Crickethn には十九日迄の八日間滞在した。

十九日の朝九時五分、忠雄は汽車に乗り、アングルジー島のホーリーヘッドから汽船で航海三時間、アイルランド島のキングスタウンからダブリン行きの汽車に乗り、夕方六時過ぎダブリンに着く。ウエストランド・ロウ駅を忠雄は、「頗るきたない馬糞の香り高き停車場」との印象を懐く。また、ダブリンの街の印象を「非常に貧しい服装をした人の多い土地で殊に子供は靴のなきものが多く非常によごれて居る。きものもボロボロが多い」と、その日の日記に記している。新聞の売りもはだしである。十九日の日記には「此の Ireland の貧困が英人の oppressin によるものならば誰か Sinn Feiners (筆者注、二十世紀はじめのアイルランドの獨立運動) に同情を禁ぜんや」とも記している。そして翌日二十日の日記には、「自由!

独立！獲得せよ Ireland 人汝の自由を！」とも書く。アイルランドは、当時イギリスの統治下にあり、自治領としてのアイルランド自由国が誕生するのは、忠雄訪問の翌年一九二二（大正二二）年のことであった。旅で忠雄は、第一次世界大戦後のイギリスの植民地統治の現状を、眼にしつかり焼き付けることとなる。

忠雄はダブリンに三日いて、二十一日は北アイルランドのベルファストへ移動する。立派な市役所の前に、タイタニック号沈没の記念碑のあるのに気づく。豪華客船タイタニック号は、ベルファストで建造され、一九一二年（明治四五）年四月十四日の夜、サウサンプトンからニューヨークに向け出港した。そして北大西洋で氷山に衝突、世界史上最大の海難事故を引き起こしたのである。忠雄はそのことに思いを馳せた。

この地は Irish Linen の名産地ということで、テーブル・クロスなどをみやげに買う。二十一日の日記には、「Belfast は非常に繁栄にて London に出しても恥かしからぬ立派な通りと商店とあり」とある。が、ベルファストは一泊もせず、夜八時半出港の汽船でグラスゴーに向かう。忠雄は北のベルファストの繁栄は、南の犠牲の上に成り立っていると思われ、居心地が悪かったのであろう。短い滞在ながらイギリス領に所属する北アイルランドと、南のアイルランドを較べると雲泥の差があるのを彼は見て取っている。「余は Belfast 及び Ulster の人間を好む能はざりき、彼等は富みて二枚以上の上衣を持ちながら之を持たぬ南方の隣人に分ち与ふるを拒むものなり」と日記に記す。Ulster は北アイルランド地方の旧称である。七月二十二日、午前八時半、忠雄はグラスゴーに上陸した。グラスゴーは、クライド川の岸辺に発展したスコットランドの商業・貿

易の中心地である。宿泊を Central Station Hotel に決め、市内見学に出かける。まず、グラスゴー・グリーン（公園）、大寺院（グラスゴー大聖堂）などを見る。グラスゴーの街には、偉人の銅像が多い。宗教改革者ジョン・ノックスをはじめ、ウォルター・スコット、ロバート・バーンズ、ジェームズ・ワット、デヴィッド・リビングストン、カンベル・バナマン、ロバート・ピール、グラッドストーンなどの銅像などを見てまわり、ケルヴィングロヴ公園のアートギャラリーで、カーライルの肖像画を観賞する。「平日にて Glasgow 見物を終へしも疲れた」との文面を日記に残している。

グラスゴーでの忠雄は、桂冠詩人ワーズワースの故郷を訪ねたり、美しい島々を見て回ったりしている。彼はスコットランドの美しい風景に魅せられたと七月二十三日の日記に書く。「山、溪流、樹木、野花、湖水等我国に似たる趣あり」というのである。二十五日には、ロバート・バーンズの生まれた家を訪ねる。バーンズはスコットランドの農民詩人である。その生家は、「低い茅葺の家で Kitchen、居間、厠、納屋と四つ室が一行にあつた。Burns の生れた bed が Kitchen の隅にそのままにあつた」と記す。バーンズ博物館も訪ねている。忠雄は文学が好きだった。旅行中も文学者の遺跡を訪うのを、楽しみにしていた。彼は積極的に旅を楽しんだ。二度と来られない所という意識が彼を駆った。

二十六日には、グラスゴーよりかなり北のオーハンまで足を延ばし、美しい海岸を堪能する。旅の間も彼は読書を欠かさない。それが生活習慣となつているので、旅中といえども、本を手にしなないといふと落ち着かないのである。オーハン近郊の山中のホテルでは、ダンテの『神曲』を読み始める。八月三日の日記には、「Dante の

Purgatory 面白し。Hell なる Purgatory といひ一寸考へると Dante は行の清浄を以て天国に入るの要件として居る様に想像せられるけれども読みて見れば Divina Commedia も亦人は信仰によりて義とせられ行によりて義とせられずとの福音の神髓を説けるものなるを知る」と記している。後に矢内原事件で東大教授の職を追われ、自宅ではじめた土曜学校で『神曲』を採り上げ、講義する始原がここにあった。なお、土曜学校については第十章で詳説する。

スコットランドへの旅は、愉快で充実した旅となった。四日はオーハンから列車でさらに北のフォートウィリアムに行き、翌八月五日は、イギリス最高峰のベンネヴィス山に登る。若い頃から富士登山をするなど、忠雄は山が好きだった。彼には険しい山でも登れる体力に恵まれていた。ベンネヴィス山の印象を「岩石累々たる男性的な山でよかつた」とその日の日記に記す。六日は昼前にフォートウィリアムを出発し、カレドニア運河を北上、モレー湾に臨むインヴァネスに夕方七時二十分に着く。投宿したホテルは、気持ちよく、「Invernes は京都の様な感じのする美しき町にて Hotel の前を川が市街を貫流し両岸樹木多く、建物は多く red-granite にて建てられて居る」と彼は当日の日記に書いている。

旅中でも忠雄は聖書を読み、祈ることを忘れない。八月七日の日曜日の午前は、川（ネス川）を遡り、公園で聖書を読み、一人祈る。運河に沿って、町を歩くと教会が多く、人々がどこからともなく現れ、教会に入っていく。「教会へ行く人の非常に多き町なり」と彼はこれまた日記に記している。その日の午後忠雄は、ネス川の畔を歩いていて、集会有一些があるので出席しないかと誘われ、川沿いの Riverside Church という小さな札のかかった教会に入る。忠雄を

感動させたその小さな教会の様子を、彼は日記に入念に記しているので、それを直接引用しよう。

入つて見て驚きたることは正面に彼のものものしきパイプオルガンのなき事であつた。長方形の小さな室で真中が通路になり左側に男子、右側に女子と分れて座し、聖句を記したる紙の札が四枚壁にブラ下げてあるのみにて他に何の裝飾もなく其の質素なる様子に早くも余の批評的心持は失せてしまつた。やがて会がママ集り頭の禿げた太つたネクタイの横つちよに結ばれてる五十男が司会して讚美歌をうたふにパイプオルガンこそなけれ普通の小さいピアノオルガンが前方にあるならんと察し居たるに意外にも何の music もなく響き渡るは男も女もありたけの大声にて歌ふ vocal sound のみ。而して讚美歌をうたふ前に牧師が其歌の精神につき簡單なるすゝめをなす。すべての模様が普通の教会と異り恰も自分の集りなるが如くに感じぬ。牧師の説教は詩編一三五篇四節、馬太伝一三章四四節等により信者の "hidden treasure" なることを説き自ら主の再臨に及び黙示録のよき説き明しを為したり。その聖書に通曉し聖書のみを説き、説教の約一時間に亘りて少しもダレざる等実に余のたましひは有るべからざる処に眞の宝を発見したるが如き驚喜を感じた。

忠雄はスコットランドの田舎町で出会つた教会の有様に驚きの眼を向ける。そこにはロンドン郊外の教会をはじめ、これまでイギリスに来て出席した教会への批判の眼があつてはじめて見出せるもの

があった。右の文章に続けて忠雄は、(あゝ、俗化せるイギリスの教会！ conventionalなる礼拝、水臭き説教、organistとchoir任せのさんびか、十五分の説教にも倦怠を感じずる会衆！ 何ぞ其の活力を失へるの甚だしきや！)と義憤をこめてイギリスの教会を告発している。それに対して、このスコットランド北方の教会の素朴な礼拝に、彼は感動しているのである。忠雄には旧約聖書「詩篇」一〇二編の十九節、

「後の世代のために

このことは書き記されねばならない。

「主を賛美するために民は創造された」(新共同訳による)

の一句が思い浮かんだに違いない。

その日、忠雄は夕飯を抜きにして Riverside Churchの夕礼拝にも出席した。関連箇所を当日の日記の続きから引用しよう。

正八時に始まる。昼間の牧師司會す。説教者は三十二三歳の職工風な青年で、馬太二十五章十人の童女の譬喩をtextとし主の再臨の恵みと之に対する信者のresponsibilityを説いた。余は実に未だ斯くの如き明快なる再臨の論証を聞きしことなし。何故に明快なるや、彼は天然現象、歴史的事実等を援用して再臨を証明せざりしによると思ふ、彼は単純に熱心に聖書のみを説いた。これが最もたましひの深き処に触れる声である。彼は再臨の信すべき証拠として「主は既に一度び此世に下り給うた。一度び下り給ひし主が再び下り給ふといふに何の怪しむべき事かあらん」といつた。彼は又「主は我々をreceiveする為めに再び臨り給ふ。我々に天にある主の許迄上り来よと言は

るゝにあらず、自ら再び下り来り我々を携へて天に帰らるゝなり」と言つた。説教約一時間、数人の熱心なる祈あり。牧師の例の註釈附にて熱心にさんびかをうたひ、入口の木箱に各自献金して静かに出て行く。最後に牧師が入口のdoorに鍵をかけて出る、簡単なものだ。最後に残りし牧師と一人の主立ちたる信者と共に余は礼を言ひ、思はず夕食抜きのことを語りしに自分の宅へ来て茶をのまぬかとの事にて三人にてブラブラ歩き乍ら其人の宅に行く。

その人の家で、忠雄は日本の教会や信仰について語る。「靈の喜びにて心溢れ従て胃腑も満ち、時計の存在を恨めしく思ひ乍ら十一時過ぎ別れた」と日記は続く。牧師はじめ三人がホテルまで送つてくれた。

翌日八月八日、矢内原忠雄は朝十時半の汽車に乗ろうと駅に向かつて歩いていると、ホテルの近くの釣橋の袂で、エプロン姿の昨日の牧師 Fraser 氏に会う。名刺をもらうと肩書きは商人とあった。「しかも服装より見れば精々荒物屋の主人公位だ、昨日の集りではドンドン司會するし外の人も minister と言つてるので本当の牧師かと思つたら merchant ！昨夜僕に「Do you Preach？」と聞いたから「Yes, often we are layman preachers」と言つて新居浜のことを話したら layman preacher とみんなが応じたが、余は此朝 Fraser 氏のエプロン姿を見て一層彼を愛する心が百倍し其大きな手を僕の片手では足りないので両手で握りしめて別れた」という。

インヴァネスでの二日間、信仰者矢内原忠雄にとつて、イギリス時代の大きな恵みの体験であつた。そこでの礼拝は、何と新居浜

での集会に近いものだったのである。彼はさらに「何故余は Inverness 迄導かれしや。何等の知識も有せざりし此地、Caledonian Canal の終点なりといふ外何等の attraction もなかりし此地を余の旅行の北の極点とせられしは全く此地における主の民に会ふが為めであつた」と記す。彼はここに神の摂理を感じているのである。忠雄のイギリス時代、否、在外研究中の大きな収穫の一つがここに見られる。彼は妻愛子に、「昨日インバネスにて、誠のクリスチャン数名と偶然に交ることが出来て生涯に数無き喜であつた。今も聖喜で心が満ちて居る」(一九二二・八・八付)の文面を含む絵はがきを出している。

この日、インヴァネスでのよき想い出を胸に、忠雄はハイランドを列車で縦断し、四時間余で南のパースに着く。例の如くホテルを決めると、すぐに街の探索に入る。宗教改革者ジョン・ノックス(John Knox)が度々説教したという教会や、スコットランドの詩人で、小説家でもあつたウォルター・スコットの旧跡を訪ねる。パースには一泊し、翌日八月九日はローランドの中心都市エジンバラへ移動する。エジンバラでは、まず、スコットランドの象徴とされるエジンバラ城を見学した。小高い丘に立つキャスル・ロックと言われる巨大な城だ。次にエディンバラ博物館(忠雄は City Museum と書く。現スコットランド国立博物館)、ジョン・ノックスの家、ルネッサンス様式のホルリールド宮殿などを見学した。続いてスコットの業績を称えたスコット記念塔に行き、「雄大な Gothic の塔実に立派なり」の感想を懐く。

八月十日は殉教者の祈念碑、監獄、宗教改革時代の墓、エジンバラ大学の旧、新両建物を見、次にジョン・ノックスゆかりの教会(St.

Giles Church)に入る。「ここは Knox の本拠にて彼の死去二週間前最後の説教をここに為すや」と彼は日記に書き留める。さらに「天折の詩人 Robert Ferguson と経済学者 Adam Smith の墓を訪ふ Adam Smith の此処にあること余は知らざりしも昨日住友の人が此処を訪ねんとして居たるにより始めて知りしなり、大きな墓なり、墓守の談によれば日本人沢山 Smith の墓を訪ふ由」とも記す。

忠雄は大学二年生の時、新渡戸稲造からスミスの『国富論』の原書講読を受け、以後、アダム・スミスが好きになり、その著『国富論』から多くを学んでいた。彼の学問が実証を尊ぶのは、スミスからの影響もあるようだ。後年土曜学校で『国富論』をとりあげるのも、長年のスミスへの親しみによる。なお、忠雄の土曜学校での『国富論』講義は、速記を忠雄が禁じたので、後年みず書房から刊行された全十巻の『土曜学校講義』にも入っていない。この日はさらにオールドタウンとニュータウンを結ぶ、ザ・マウンドの土手の上にある国立スコットランド美術館を見学した。どこへ行つても矢内原忠雄は行動的であり、美術館や博物館には、せっせと足を運んでいる。

翌十一日は、観光バスに乗り、エジンバラの名所旧跡を觀てまわる。この日の日記の一節に「Wordsworth の詩にて聞き及びし Yarrow の流れも今日こそ見たれ。但し英人には Sir Walter Scott 一点張りにて此国は彼の名を取りて Scotland と命名せられたかと思ふ位だ」と書きつけている。十四日の日曜日には、ジョン・ノックスが牧会したこともあるセント・ジャイルズ大聖堂の礼拝に出席する。長老教会(Presbyterian Church)である。「Church of England より遙かによいけれどもどうも何派に拘らずこのあまり

チャンとした教会には霊力が乏しいものだ」といかにも忠雄らしい観察を日記に残す。「チャンとした教会には霊力が乏しい」とは、矢内原忠雄の既成教会への痛烈な批判であり、二十一世紀の世界の宗派教会批判にも通じるものがある。それはともあれ、イギリス滞在中の忠雄が、日曜日にはどこでも礼拝に出、さまざまな教派に接したことは、後年の彼の伝道生活に資するものとなった。

矢内原忠雄のスコットランドの旅は、恵まれた日々の連続であった。旅は彼の信仰の訓練となる。ジョン・ノックスゆかりの教会を訪ねたり、ワーズワースやスコットなどの墓や旧跡に行ったりと、彼は時間を無駄にすることなく巡り歩く。二十二日には産業革命で知られるイングランド北西部の工業都市マンチェスターへ行く。例の如くホテルにチェックインすると、すぐに市内探訪に出かける。「市街主なる処を一通りあるく。Art Galleryは立派なり。その他は汚い殺風景の市街なり。大阪を日本のManchesterといへども大阪の方が遙かにManchesterよりは大会なり」と当日の日記に忠雄は書いている。

この後忠雄は、ストラトフォード・オン・エーヴオンに向かった。途中、ラグビーで下車し、ラグビー・スクールを見学する。ラグビーやフットボールの発祥地で、パブリック・スクールの教育を刷新したトーマス・アーノルドが校長をした学校である。忠雄は「Thomas Arnoldの墓石の前に立ちたる時は胸が一杯になつた」と言い、さらに「此世のfameは消え行くといふ。併しArnold先生の名は東海の遊子をこの処にattractしその胸の浪を異常に高めた」とも日記に書く。彼の頭には自然に「高時代の恩師新渡戸稲造が浮かぶ。彼はラグビーから、スイスにいる新渡戸稲造に、近況を知らせる絵

はがきを出している。

ストラトフォード・オン・エーヴオンは、イングランド中部セバーン川の支流エーヴオン川に沿う町で、言うまでもなくシェークスピアの生地である。着いたのは、一九二二(大正一〇)年八月二十三日で、ここに彼は一泊する。翌二十四日の午前中は、シェークスピアの生家・墓のある教会・引退後過ごしたNew Place、関係図書館、美術館などを見学、夕方前には大学町のオックスフォードに着く。二十五日はクライスト・チャーチ・カレッジはじめ、二、三のカレッジを見学した後、ケンブリッジに向かう。

二十六日はケンブリッジのいくつものカレッジやフィッツウィリアム博物館などを見学する。忠雄は日記に「大学のmuseum及galleryを我国大学に必要と感じた。沢山の古文書名画等を持つて居ながら土蔵の中にしてしまつておく程馬鹿気たことはない。宜しく立派な陳列場を設けて学生始め公衆に観せるべきだ」と記している。後年東京大学総長として、図書館・博物館・資料室の充実に尽くした矢内原忠雄の原点がここにも求められる。

この日の夕方は、ベッドフォードへ行く。ここは王政復古期の作家で『天路歷程』などの著者ジョン・バニヤン(John Bunyan)の生地である。バニヤンは王政復古後、改宗を拒否したため投獄され、その主著——『聖なる町』、自伝『溢るる恩寵』、そして『天路歷程』は獄中で成った。忠雄は日記に、「BedfordはBunyanの生れし地、福音の為めはたらきし地十二年間牢獄につながれし地なのである」と書いている。翌日はBunyan Meetingに行き、バニヤンの遺品を観る。また郊外のバニヤンが結婚して住んだ家や通った教会を見る。好奇心と健康あつての諸処の見学であった。八月二十七日の日

記には、「七月十二日から此日迄約七週間の長旅行、多くの土地と多くの人々を見た、其間恙なく壮健にて帰るを得たるを感謝した」と記している。

ロンドン郊外の下宿に戻ると、若干の手紙が日本から届いていたが、妻愛子からのものがない。忠雄は何事であるかと怒るが、一方、妻が病氣かと思ひ、心配する。「病氣なら病氣と誰からでも言つて来てくれたらよささうなものだ」とも考える。旅行で留守の間に届いた郵便物で彼が一番喜んだのは、『基督者の信仰』が本になり、五冊届いていたことであつた。本書誕生までのいきさつは、すでに第五章の「四 処女作『基督者の信仰』」で詳しくふれている。忠雄は内村鑑三の添えてくれた本書の「序文」を読み、感動する。その一節には、「君が法律又は経済学を棄つる時はあるとも、君が此書に於て表白する所の信仰を去る時は永久に來ないと余は信ずる」とあつた。

### 三 ドイツでの日々

一九二一(大正一〇)年九月十二日、矢内原忠雄はイギリスを去つて、夜、汽船に乗り込み、ドイツに向かつた。翌十三日早朝、オランダ着。七時十分頃ドイツ行き列車に乗り、ベルリンのFriedrich Strasse 駅に着いたのは、午後九時十七分であつた。期待していた一高弁論部で一緒だった井口孝親(大阪朝日新聞社を経て九大教授)も、東大の同僚舞出長五郎も出迎えには来ていなかった。はじめての地は案内人が欲しいものである。が、彼はイギリス各地を一人で巡つ

た後だけに、旅に慣れたこともあつて、支障なくベルリン駅前のホテルにチェック・インする。

翌日井口と舞出双方の下宿を訪ねると、二人とも旅行中とのことだつた。その日は水曜日だつたが、次の週の十九日、月曜日から忠雄は Dahlem, Werderstrasse 24 の Fraulein von Viebahn 氏の家に引き移る。キリスト教の信者の家である。彼はこの家でベルリンでの生活を送りはじめた。二日前の十七日、土曜日には、マネ、モネ、ルノアールなど印象派の作品を所蔵する Nationale Galerie を見学している。ベルリンには当時、多くの日本人が滞在していた。為替レートによるマルクの下落は、ドイツ人には痛かつたが、円高の日本人には有利であつた。

Dahlem, Werderstrasse 24 の下宿先は、閑静なところであり、忠雄はいたく気に入つた。「ああ腐敗墮落せる伯林の町から此の閑静なる Dahlem に來りて恰も Satan の虎口を逃れ出でた様な氣がしてホツとした」と引越した九月十九日の日記にはある。この記事に対応するのは、二日前の十七日の日記中の、「午後はよほど危き淵まで悪魔の爲めに誘はれた。然り余は神の前に大なる罪を犯した! 神は余の良心を刺戟して墮落を最後の瞬間に防ぎ給ひし」にある。「最後の瞬間」で彼は悪魔の手を脱したというのである。淫売婦の誘惑にでも遭つたのだらうか。

下宿の人々は皆よい人であつた。彼はイギリスでもドイツでも下宿には恵まれてゐる。この下宿には家事手伝いの若い女性が二人いて、その中の一人 Hanna Kriegsmann がドイツ滞在中の忠雄を慰めることになる。日曜日は一緒に教会に行つてゐる。ベルリンの南西郊外にあるポツダムへ一緒に遊びに行つた九月二十九日頃からハ

ナとは特に親しくなる。この日の日記に彼は、「少しさむかつたが秋の景色が美しかった」「日暮れてから空腹を抱へて帰つた。八時半。Nahm zum erstmalig hannas Arml (筆者注、はじめてハナと腕を組んだ)」とある。親しくなつたドイツの若い男女のどるごく自然な姿である。以後、当時の日記を見ると、「午後Hannaと植物園へ見に行つた」(一〇月四日)、「三時半頃からHannaとBerlinへ買物に行つた」(一〇月五日)、「午后Hannaを動物園に連れて行つてやつた」(一〇月三日) などとある。ハナは忠雄にアルバムを見せたり、ドイツ語の讚美歌を教えたりした。忠雄はハナの zart (筆者注、優しい) な点が何よりも好ましく思われたのである。

十月十七日の日記には、「zartな彼女はいつも余がtraurig (筆者注、憂いに沈む) である時は自分も非常にtraurigになるのだ」とか、「余は余を信じ愛してくれる妻子朋友の居る日本へ帰りたく思つたといつたら彼女は非常に泣き出して何卒まだ帰らないで居て下さいと言つた。本当にHannaは僕を信じてくれる、愛してくれる、慰めてくれる。此際Hannaが居なければ僕はどんなに淋しいか知れない」とある。この日の夜から彼はベルリン大学、パウル・ロオイッシュ教授 (Dr. Paul Leusch) の講義に出始めている。十月二十一日の日記には、「今日は勉強をしたく思つたがHannaとの約束があるので午後 Schlachense へ散歩に行つて夕方帰つた。景色は非常によかつた。今やHannaは愛子に次ぎて余の愛する女である」とある。

単身外国に生活する者は、誰しも寂しさを感じるものだ。しかも、忠雄は外国にあることすでに一年に及ぶ。そうした折りに、美しく、zartな若い女性がいて、いろいろ面倒を見てくれるとなると、心は自然に彼女に傾く。これは妻への背信行為というよりも、人間の

自然な感情である。しかし、人は弱いことを忠雄はよく承知していた。彼はハナとの交際を「友情」と考えることで、危機を脱する。この年十一月十四日の日記には、以下のような文面を見出す。

Domäne への往復途中ハナが其縁談のことを打開けて話してくれ大に同情した。今は彼女と僕とは非常に親しき友人となつて凡てを共に語りて慰めあひ励ましあふ。此の親切な zartな Lug (筆者注、賢い) な女を妻とする者は真に幸福だ。しかしそれだけ又よい夫を彼女に持たしたいものと切に思ふ。彼女が余の心の動き方余の心中に思へることを察するの鋭敏なるは驚くばかりである。実に彼女は短き間の友人なれども今や世界に於ける余の最大の、最も余の胸に近き友人となつた。若し余が未だ独身であるならば彼女を妻とするかも知れぬと思ふ程だ。

忠雄はハナを愛していた。妻ある彼はその感情を「友情」と自身に思い込ませる。彼はむろん日本に残してきた妻愛子を愛していたのである。それゆえ、その便りをいつも心待ちにしていたことは、日記を読むとよくわかる。イギリス時代から彼は常に日本の愛子からの手紙を、首を長くして待つていた。が、彼女は病氣勝ちで手紙を書きたくとも書けない状況にあつた。金沢の実家での子育てや周りの人々の病氣看病もあつた。それらはきびしい肉体労働をも伴つていた。一日を終え、さあ、手紙を書かねばと思つても眠気が襲う。忠雄は三十歳を前にして、少年時代からのどこかわがままな性格をそのまま持つていた。愛子を愛しながら、愛子が自分に十分応えてくれないことを嘆くのである。十一月十八日の日記には、手紙の

来ないのを歎き、「余の感情の鋭敏なるは愛子既に熟知の筈だ。彼女がこんな下手紙を怠ることは愛の冷却、少くとも忠実の欠乏としか余には思へぬ。余が孤独留学中にて彼女の愛を最も要求する時に常より彼女の態度がこんなに不誠実なるは彼女の肉体の病氣以上に余には苦痛であり心配であるのだ」と書きつけている。客観的に見てこれは忠雄のわがままさを示している。愛子が「不誠実」に忠雄に映るのは、彼女の置かれた状況への配慮のなさから来る。愛子が病氣勝ちであること、また、子育てのほかに実家の病人の面倒も見なければならなかったという重荷を負っていたことは、わかっていたはずだ。忠雄はそうしたことに配慮せずに、日記では一方的に妻愛子を責めている。

ハナとの出会いは、そうした折に訪れたのである。前にも述べたが、一般的に見て、外国にいと日本からの便りは鶴首して待つが、日本にいる者は忙しさに追われ、手紙どころではないといった場合がしばしばある。愛子の場合もそうであり、愛する夫への手紙を書きたくも書けない日々が続いたのである。子息の矢内原伊作は、当時の矢内原忠雄夫婦を論じて、「留学中の忠雄はひまで、しかも彼はもともと文章を書くのが好きで、少年時代以来ずっと文章を書き続けてきているのだから、週に一度手紙を書くことは容易だったろう。しかし愛子のほうは、文章を書くことに慣れていない上に、三歳と一歳の幼児をかかえ、おまけに病気がちだった。そう頻繁に手紙を書けなかったとしても無理はない」と書き、愛子に同情する。他方、忠雄の立場にも理解を示し、期待している愛子からの手紙が少なく、淋しさを感じていたことゆえ、「若く優しい女性ハナの存在こそベルリン滞在中の彼の最大の慰めであり支えであった」とも

書く。伊作のこの理解は、双方の立場をふまえた、妥当な判断だとしたい。

忠雄はハナのことを、妻愛子にも伝えていた。この年十月二十日付の愛子宛絵はがきには、「今日は好天気であつたので午后三時間許り散歩をして此の国の湖水の岸を歩きました。東京の井の頭の池に似た趣があるが井の頭よりは大きくもあるし景色もすぐれて居る。樹木の秋色が何とも言へずよかつた。ハナが一緒であつた。ハナの為に非常に慰められる」とある。愛子にはもつと率直にハナのことを伝えていたとは思うが、全集収録書簡中ハナのことが出て来るのは、この一通のみである。他は破棄されたのではなからうか。ハナとの深い精神的交際は、ベルリン滞在中続く。

忠雄はベルリンでは大学に籍を置かず、パウエル・ロオイシユの講義を聴講し、神学部の学生、Herr Schrank からギリシャ語やカントを学んだ。「報酬は一回十五<sup>マルク</sup>麻、此外の電車代二<sup>マルク</sup>宛とふることに約束す。今日は其第一回をやつた。いろんな事が聞けて面白い。もつと早く学生を得ればよかつたと思ふ」と十一月十五日の日記に忠雄は記している。内村門下の石川鉄雄がベルリンに来たのは十月下旬のことで、その下宿などの斡旋をする。

ドイツ滞在中で矢内原忠雄は、そろそろ旅に出、新しい国へ行きたくなる。十一月二十六日の日記に彼は「もう独乙にも倦きて又新しき国に行きたくなつた」と書くが、それが表現するのは、翌年四月以降となる。十一月二十二日の日記には、「Herr Schrank 来り Kant をよむ」とある。また、同日の日記には、「黒崎兄より一通、愛子より一通、ハガキ二つ、安昌兄より一通手紙来りいづれも嬉しかった」とある。黒崎兄とは言うまでもなく、黒崎幸吉のことであ

る。さらにこの日の日記には、忠雄や黒崎がルターを熱心に研究している様がわかる記述がある。

十一月二十五日の日記には、「午后Hannaと共に外出。Grunevaldを一時間散歩したる後市中に行きWethelmにて写真をうつし夕食後Sonbartを聞いて帰る」とある。男女が二人して写真を撮るのは、愛の証でもある。その写真は残っていない。十二月十四日の日記の一節には、「伯林到着後出したる手紙の返事が千代、啓太郎其他より来てうれしかった。あい子からは一つも来ないので失望した。何故彼女はこんなに手紙をくれぬのか?と思ふと心が重くなつてしまふ」とある。

再び記すが、外国にいと日本からの便りが待たれる。留学の身は、比較的自由で日常の拘束がない。手紙を書く時間はいくらでもある。が、日本にいと日常の仕事が多く、外国への手紙どころではない日々が続く。その上、愛子とはかく病氣勝ちであった。忠雄にはそれがわからない。そうした状況下で、忠雄が若く聡明でやさしいハナに気持ちが傾くのも無理はない。忠雄はそれを日記に率直に書き留めている。待ちに待った愛子からの手紙は、十二月十七日に届く。翌日十八日の日記には、「夜余とHannaとの友情について大分考へた。注意を要する点がある」との文面を見出すことができる。忠雄は自省しているのである。ハナとの交際に、ある危機を感じていたようである。

舞出長五郎が流行性感冒の疑いでサナトリウムに入院したのは、この頃のことである。肺炎が心配されたが、幸い大事に至らずに済んだようだ。忠雄はサナトリウムに舞出を見舞い、医者から軽症ではないことを告げられる。舞出は無神論者であった。十九日の忠雄

の日記には、「不景気なるSanatoriumに一人高熱になやみつ、横臥せる彼を見て同情に堪へなかつた。神の愛を知らず又人の心よりの愛の看護を受くることなく病臥することは殆ど堪へ難き迄の痛苦ならんと思はる。切に彼の恢復の速かならんことを祈る。今日は終日彼のことを考へた」とある。誠実でやさしい忠雄の一面の現れる記述だ。

留学中の国、ドイツのハイデルブルクには、東大の同僚大内兵衛も来ており、その頃ベルリンに上京し、忠雄と会うことになる。十二月二十二日の日記には、「大内君の訪問を受けた。大学の同僚諸教授によせ書きした」とある。忠雄は大内のいるハイデルブルク大学には、ドイツを去り、フランスへ移住する寸前に行くことになる。この年(一九二二・大正一〇)の十二月三十一日の日記には、「かくて一九二一年は去つた。例により怠惰と失敗と罪の一年であつた。併乍ら又キリスト我を支へ主にある新しき我の若干成長したる一年であつた」と彼は記している。

矢内原忠雄の留学時代の日記は、ここで終わる。一九二二(大正一二年)以降のヨーロッパ滞在日記は、全集に見出せない。このことに関して矢内原伊作は、『留学日記』は大正一〇年一月三十一日で途切れていてそのあとがない。彼が日記をつけるのをやめたのか、それとものに破棄したのかそれは不明である。また留学中に頻々と彼が愛子に書き送つた夥しい手紙は、すべてのちに処分されて残っていない。簡単な絵葉書だけが処分を免れて残っているだけである」と記す。筆まめで、それまで日記は毎日書き、書けない日があつても、後でその日のことを思い出して当日の日付で記録に残すほどの人ゆえ、日記をつけなかつたとはとうてい考えられない。恐

らくは残すことに不都合なことがあつて破棄されたのであろう。

不都合なことの第一には、ドイツ女性ハナのことがあつたと思う。

ハナは留学中の彼を慰め、労つてくれた存在である。が、男女の交際には、いつも危険が伴う。彼はそれを自覚していた。その葛藤は一九二二(大正一一)年の日記に綿密に記されていたはずである。が、次章(第七章)で扱ふ妻の死という嚴肅な事実の前に、それらは安撫な自省でしかなかつたのであろう。彼は自ら当該日記を、懺悔の気持ちをもつて妻の死後に破り捨てたとなつたい。そこで以下は、他の資料(全集収録「年譜」や書簡、旅行記など)によつて、留学時代の矢内原忠雄の足跡を追うことにする。

#### 四 パレスチナ旅行とフランス生活

一九二二(大正一一)年一月三十一日付の文部省からの連絡で、フランスを在留国に追加するという連絡を得た忠雄は、フランス行きの前に、各地を巡ることにした。三月一日にはドイツ第二の都市、ハンブルグを訪れた。ハンブルグはエルベ川河口のアルスター湖に沿つた港町で、早く十三世紀にはハンザ同盟の指導的都市として繁栄していた。彼はドイツに来たからには、ハンブルグを見ておきたかつたのであろう。その後、いったんベルリンに戻つたのち、四月一日には、チェコスロバキアのプラハへ行く。プラハでは一泊し、二日、オーストリアのウィーンへ。ベルリンから鉄道で南下する古都への旅であつた。忠雄のことだから、それぞれの都市では、ホテルに荷物を預けるや町の観察を精力的に行つたことだろう。プラハ

もウィーンもヨーロッパの代表都市で、見所は多かつたはずだ。

次にイタリアに入り、トリエステ、フィレンツェ、アシジ、そしてローマ、ナポリに行く。ローマでは同じく旅をしていた大内兵衛と再会している。その間の愛子宛書簡が数通全集に収録されている。イタリアのトリエステから出したものには、「ウィーンからユーゴ、スロバキア国の領内を通り昨夜当地に着いた。其間の景色は山が多くて日本の様であつた。田舎道に十字架の像が立て、あるのは丁度日本のお地藏様の様であつた。国が旧教の国だからだ。当地ツリエステはもと奥大利領土なりしを欧州大戦の結果イタリア領となりし海港である。久しぶりで海を見た、風が寒くていやだ。今日はここを立つてベネチアへ行く」(一九三二・四六付)とある。

フィレンツェでは、ミケランジェロ、ラファエル、ダ・ヴィンチなど、観るものが多く「目が回る位だ」と書いた愛子宛の絵はがき(一九三二・四二付)もある。イタリアは、一高時代の仲間恒藤恭と長崎太郎が二年後共に旅する地でもあり、当時の留学生が必ず訪れる観光地であつた。

イタリア旅行に次ぐ彼の新たな旅の目的は、パレスチナ行きにあつた。彼は船で地中海を横切り、エジプトのカイロに渡る。そして、四月二十七日、鉄道で北上し、エルサレムを目指した。在外研究中の大きな計画の一つパレスチナへの旅は、こうしてはじまつた。矢内原忠雄のパレスチナ訪問は、二週間に及んだ。幸いこの旅に関しては、彼自身が「パレスチナ旅行記」と題して、畔上賢造編輯の雑誌『靈交』第十一〜十二号(一九三三・八・九二)に発表し、のち『矢内原忠雄全集』第二十六巻に収録されたので、旅のおおよそはうかがえる。

「パレスチナ旅行記」は、四百字詰原稿用紙にして約二十二枚ほどの話術体の紀行文である。それによると、忠雄は一九二二(大正一二年)四月二十七日午後六時十五分発の列車に乗って、エジプトのカイロを出発。スエズ運河の岸のカンタラ駅で乗り換え、荒漠としたアラビア沙漠を通り抜け、ラッドで再び乗り換えて、翌日の正午にエルサレムに着く。忠雄は「早いものです」と言い、「此道は古来隊商の往還道ですからヨセフが売られて埃及へ行つたのも、老いたるヤコブが愛子<sup>を</sup>を尋ねて行つたのも後のヨセフがマリヤとイエスを労はりつゝ、逃げて行つたのも此道筋に違ひありません。二十世紀に至つても港の悪い Jaffa (昔のヨッパ) 迄船で来ないとエルサレムへは行けなかつたのですが、大戦争のおかげ(?)でイギリスの軍隊が軍事上の必要から此鉄道をつけてくれたのです、途中でガサの町を通ります、サムソンが町の門の柱を引き抜いた処です(士師記十六章)」と書く。

「パレスチナ旅行記」は、エルサレムについての詳しい記述がまず来る。エルサレムは言うまでもなくパレスチナの中心都市で、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地で、現在は世界遺産にも登録されている歴史のある街である。忠雄は以下のように語る。

エルサレムは「山の上に建てられた」城壁に囲まれた町です。ユダヤの様な山地では大きい町は山の上に建てる外に場所がありません、それに要害堅固といふ利益もあります。エルサレムは二つの山の上に跨つて建てられて居ます、東はモリアの山にてエホバの宮、ソロモンの宮殿のありし処、西はシオンの山にてダビデの城のありし処です、其間に浅いヨセフアスガチロポ

エオン (Tyropeon) と呼んだ谷があります、今のエルサレムの町の範囲は主の御時代とは多少の相違がある様ですが大体は勿論変わらないと思ひます。

「エルサレムへ来て主の御あとがしのべるかしら？」とは私が見るまで抱いて居た疑問でした、答は然りとも否とも言へませんが、彼のエホバの宮の跡、ユダヤ国民生活の中心として燔祭の煙の立ち昇りし処、イエスが御生涯中最も心血を注いで働かれ其御心が最も密接に結びつかれて居たのも此の処ではありませんか。「父の家」に「子」も住まるべきではありませんでしたか(ルカ二の四九参照)。彼が御一生最後の努力として心血を注いで教へられたのは実に此の処なのです(ルカ二の三七、三の五三)。橄欖山に上りますとケドロンの谷を隔ててすぐ眼の下にエルサレムの町が見渡されますが中でも宮の敷地は一ばん手近に、一ばん広く著しく見られるのです。「エルサレムよエルサレムよ我れを牝鶏の雛を集むる如く、云々」とイエスが嘆ぜられた時にもエホバの宮が御心の大部分を占めて居られた事と思はれます、その宮の跡は今もモハメット教徒の聖地となり燔祭の祭壇の置かれしと伝へられる岩と、ソロモンの宮殿の跡地とに大きなモスク(モハメット教の寺)が建てられ、モハメット教徒以外の者は午前七時半から十一時迄の外は此広い敷地に一歩たりとも足を踏み入れる事が出来ません。その事を知らないで着いた日の午後私が謹んだ心持ちで門を叩いて居ますと鉄砲を持った男にえらい権幕で追ひ出されてビックリしました。此処に限らず聖地特に旧約関係の聖地でモハメット教徒の手に移つて居るのが随分沢山あります。シオンの山に主が最後

の晚餐を取られた二階座敷の跡といふ建物がありますが之もモスレムのもとなつて居ります。彼等は其宗教を保つこと恐しく嚴重で排他的でとてもやり切れません。イシマエルの子孫がイサクの子孫を追つ払つて幅をきかして居るわけです。

矢内原忠雄は聖地に立つて、さまざまな感慨にふける。歴史はいま立つ地によつて、確かめられると彼は思う。彼は右の聖地の現状に加え、キリスト教の聖跡カルバリの丘に建つ複雑な構造の聖墓寺(聖墳墓教会)に言及する。「主が十字架上エリエリラマサバクタニの苦しみを味はれし地はあまり美術的にもあらざる寺院に被はれ、十字架の立てられし所とか、主の屍にニコデモが油塗りし処とか、聖墓とか、天使の立ちし所とかが銀や大理石や蠟燭やランプで飾られて居ます」と言い、奇態なことにもこれらがゴルゴタの丘に建つ禮拜堂はローマ教会に、十字架の立てられた所のチャペルはギリシヤ教会に、さらに主の墓のチャペルにつるされた四十三個のランプまでそれぞれの教派に分属し、聖所分割の特権を持つローマ教会・ギリシヤ教会・アルメニヤ派・コプト派の四派は、「互に己の権利を主張して譲らず相争うて」いる。

しかも、争わないように取り締まるのは、モハメット教徒であるという現状を前に、忠雄は「ローマの兵隊が十字架の下で主の衣類を分け取りにした様に今はキリスト教がランプの数の争をしてモスレムに取締られて居るさまは何等の奇観！ 何等の醜態！ 天真爛漫たる主はこんな窮屈な処に留まるを欲し給はぬは明らかです」と書く。ランプ争いはベツレヘムの誕生寺(聖誕教会)でも見られると忠雄は指摘し、そうした現象は、「信仰墮落の危険を伴う」と言

うのである。忠雄の面目躍如たるところだ。

けれども、いくらモスクを建てても教会を建てても橄欖山全部を寺で埋めることは出来ない。「イエスの地に於てイエスを思ひ味ふことは非常に幸いなことである」と忠雄は言い、「パレスチナ見学は私に聖書の良き説明を与へてくれました。聖書は一層私にとりて興味津々たる書となりました、歴史書としての其確実さが一層明瞭になりました。歴史は地理によりて確められる時一層確実なる印象を刻みます。聖書の現実さ確実さ、イエスキリストの嘗て我等の一人の如くして此の地上に住みし事実を最も明瞭に味ひました」と言う。これは現代のイスラエル旅行、——聖地巡礼の本来の意味にも通じるものがある。

忠雄はパレスチナの動物や植物にも鋭い視線を向けている。それと同時に「近年ロシヤ、ルーマニア、ポーランド等より移住し来たりたる猶太人」の姿も見逃していない。忠雄は彼らが荒地を緑の野に変えているのに深い感動を覚えたのである。彼は猶太人の植民地村を訪れ、強い印象を受ける。そして「私は聖書の預言より見てもイスラエルの恢復の必然なるを信じます」との一文を書きつけることになる。

かくて矢内原忠雄の「パレスチナ旅行記」は、先見性と預言性に満ちたものとして、高く評価できる紀行文となった。それは彼の帰国後の植民政策研究にも、大きな影響を与える旅となったのである。後の「シオン運動(ユダヤ民族郷土建設運動)に就て」(『経済学論集』一九三三・一〇)はむろんのこと、「植民及植民政策」(有斐閣一九二六・六)や「植民政策の新基調」(弘文堂、一九二七・二)などにまとまる研究の基盤は、ここにあったと言つても、過言ではあるまい。

二週間のパレスチナ旅行を終えた忠雄は、五月十日、アレクサンドリアを発ち、スイスのジュネーブに向かった。十五日、ジュネーブに着いた彼は、川西實三の家に数日世話になる。川西は当時国際労働機関帝国事務所代表随員としてジュネーブに駐在していたのである。日本の妻、愛子宛絵はがきに、「アレキサンドリア以後は海上二日、伊太利通り抜けの夜汽車三日の旅程を経て一昨日瑞西国ジュネーブ着。川西さんの家庭に厄介になりて居る、川西さん処では三月末男の赤ちやん御産、皆さんは丈夫に暮して居られる。当地にて新渡戸先生にも既に度々お目にかゝり非常にうれしく、なつかしく思つた。ジュネーブは仲々きれいな落ちついた処だ。併し早く伯林へ帰つてお前のたよりを知りたい」(一九三二・五・一七付)と記している。

忠雄はその後チューリッヒを経て、二十一日にベルリンに戻った。約二ヶ月ベルリンを留守にしていたことになる。八月にはワイマールやハイデルベルグなどへの小旅行もしている。ワイマールは、ウィーラント、ヘルダー、ゲーテ、シラー、そしてリストなどが住んだドイツ精神文化の地である。ワイマール憲法でも知られる。ハイデルベルグは、ドイツ最古の大学(ハイデルベルグ大学、東大の同僚大内兵衛の留学先)があり、キリスト教改革派のすぐれた教理問答「ハイデルベルグ信仰問答」の生まれた地である。

忠雄がフランスのパリに移るのは、八月二十九日のことである。パリの住所は、*Chez Mlle. Bosq, Ibbis Reu Chardin Paris 16* だった。パリには三ヶ月ほど滞在した。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、一九三二(大正二二)年九月十七日パリ郊外フォンテーヌブローの森で、三谷隆信と舞出長五郎の三人で撮った写真が載っている。

山高帽を被った忠雄は、元気そうである。三谷隆信は当時ジュネーブの国際連盟事務局に勤務していた。舞出長五郎は留学地のベルリンからパリに旅行に来ていたのである。その夜、三人はバルビゾン村に泊まり、旧交をあたためている。

パリに本拠を定めた忠雄は、相変わらず各地への旅や、ルーヴルをはじめとする美術館・博物館めぐりに日々を送る。フランス時代の日記がないので、イギリスやドイツ時代のような詳しい動静をここに記すことはできない。しかし、これまでの在外研究生活から推して、大学に籍を置き、授業にきちんと出ることなどなかつたであろう。

矢内原忠雄の留学期間の二ケ年は、こうして過ぎていった。留学期間は十二月二日(水)迄であった。彼は三ヶ月の延長を文部省に申し出、翌年一九三三(大正二二)年三月三日(月)までの期間延長が認められた。留守宅のことは心配であったが、二度とない海外生活である。彼は希望の叶ったことを喜び、美術館通いやパリ近郊の名所を見、また、各地を旅した。パリに来た黒崎幸吉と再会するのは、一九三二(大正二二)年十一月一日のことである。その夜、忠雄の妻愛子の姉で、藤井武に嫁いでいた喬子の死(一九三二・一〇・二)を聞く。忠雄は妻への便りに、「黒崎さんから始めて聞いた藤井の姉さんのことやを思つて胸が苦しくなる」(一九三二・一一・二付)と書き付けている。

注1 山下陸奥「新居浜時代のことなど」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三

- 日収録。五三〇五七ページ
- 2 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月三日、三三六ページ
- 3 田原悦子「ただにい忠兄さんさんの思い出」『矢内原忠雄全集』月報28、一九六五年六月一日、のち『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。六四一〜六四五ページ
- 4 倉田百三「生活批評―矢内原忠雄君にあたふ―」『第一高等学校校友会雑誌』第二二七号、一九一三年六月十五日
- 5 大内兵衛「日本植民学の系譜」『矢内原忠雄全集』月報1、一九六三年三月一日のち『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。七一〜七五ページ
- 6 大内兵衛「赤い落日―矢内原忠雄君の一生―」『世界』一九六二年三月一日、のち『高い山―人物アルバム』岩波書店、一九六三年一〇月一〇日、一〇八〜一三三ページ、『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。三二〜四四ページ
- 7 注2に同じ三四三ページ
- 8 矢内原忠雄「矢内原悦子宛書簡、封書」『矢内原忠雄全集』第二九卷、一八ページ
- 9 矢内原忠雄「私の伝道生涯」『橄欖』11号、一九五二年二月〜一九五六年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六卷収録。引用の箇所は、一八七〜一八八ページ
- 10 注2に同じ。三三九〜三四〇ページ
- 11 関口安義「評伝長崎太郎」日本エディタースクール出版部、二〇一〇年一月二〇日。一五一〜一五三ページ
- 12 注2に同じ。三五二〜三五三ページ
- 13 黒崎幸吉「恩恵の回顧」『永遠の生命』第三四七号、一九六〇年八月、のち『黒崎幸吉著作集5』収録。三六〇ページ
- 14 内村鑑三「日記」『内村鑑三全集』33、岩波書店、一九八三年五月二四日。二三三ページ
- 15 矢内原忠雄「私の歩んできた道」東京大学出版部、一九五八年三月三十一日。のち『矢内原忠雄全集』第二六卷収録。二八ページ
- 16 注2に同じ。三五六ページ
- 17 注2に同じ。三五八ページ
- 18 注2に同じ。三五八ページ
- 受領日 二〇一四年三月十八日  
受理日 二〇一四年六月四日